山の播隆

江戸時代後期の念仏行者・播隆がその修行の道中山岳史上に残した功績は輝かしいものがある。文政年間（1818～1830）における伊吹山禅定、文政６年（1823）の笠ヶ岳再興、文政11年（1828）の槍ヶ岳開山、そして開山のその足で行なった穂高岳登拝。それらの偉業は播隆ひとりの力で行なわれたのではない。播隆を支えたのは当時の民衆の願い、祈りであった。

穂高より雲海の笠ヶ岳

播隆像　上條俊介作
岳都・松本の玄関口（ＪＲ松本駅前）に建つ播隆像

＊ＪＲ松本駅の播隆像前で７月中旬に播隆祭が行なわれる
＊槍ヶ岳山荘では９月の第１土曜日に播隆祭が行なわれる

発　行　播隆祭実行委員会
松本市中央1-23-1
松本商工会議所内
TEL 0263-32-5355
協　賛　松本市市制施行100周年
記念事業実行委員会
槍ヶ岳山荘・槍沢ロッヂ

発 行 日　平成19年５月１日
表紙写真　穂苅貞雄
執筆／写真　黒野こうき
協　　力　ネットワーク播隆

松本市制 100周年 2007
輝くひと きらめく未来 100彩まつもと

槍ヶ岳開山

播隆（ばんりゅう）

伊吹山禅定（ぜんじょう）　笠ヶ岳再興　穂高岳登拝（とうはい）

夏の槍ヶ岳　槍沢岳にて

播隆肖像画

里の播隆

山を下りた播隆は念仏講の人々に招かれ教えを説いて歩いた。自らに厳しい播隆は生き仏のように人々から慕われ、宗派にとらわれないで念仏を広めた。後年、播隆は里の念仏講の人々を槍ヶ岳の山上へと導く槍ヶ岳念仏講を組織した。各地に残る播隆筆による南無阿弥陀仏の名号(みょうごう)碑、名号軸、播隆念仏講などによって播隆をしのぶことが出来る。

播隆の生涯

播隆は江戸時代後期、天明6年(1786)に越中国河内村(富山県富山市河内)で生れた。山里に育った播隆は、十代のある時期に故郷を出、家は浄土真宗であったが上方(京都、大阪)、尾張(名古屋)の各宗寺院を遍歴した後、浄土宗の僧侶となった。

播隆の純粋な求道心は当時の宗教界になじまず、修行の場を山岳(修験道)に求め、各地の深山幽谷で念仏行を実践した。山における播隆の足跡は伊吹山禅定、笠ヶ岳再興、槍ヶ岳開山、穂高岳登拝と山岳史の上に輝かしい功績を残した。

播隆は自らの修行だけに生きた念仏行者ではなく、里にあっては念仏の普及につとめ、わかりやすく教えを説き、民衆とともに生きた聖(ひじり)(民間宗教者)のひとりであった、登拝信仰を確立して槍ケ岳開山を成し、念仏講の人々を山上へと導いた。

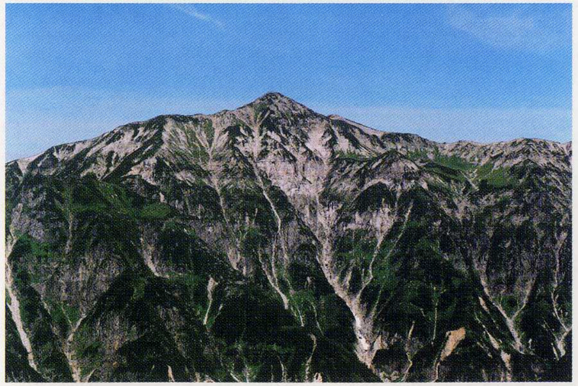
天保11年(1840)、槍ヶ岳の登拝者のために念願であった「善(ぜん)の綱(つな)」鉄鎖を山頂に設置、岐阜県美濃加茂市の中山道太田宿で行年55歳をもって死去した。

各務原市から伊吹山

伊吹山禅定と笠ヶ岳再興

播隆は各地の山岳霊場、修行場で修行したが、特に大きな足跡としては伊吹山での山籠修行、笠ヶ岳の再興、そして槍ヶ岳の開山がある。播隆といえば槍ヶ岳開山だが、伊吹山山麓の足跡は濃く、槍ヶ岳開山以前にすでに播隆の帰依者は多く、播隆を開山とする寺院が現在2ヶ所(揖斐川町の一心寺、岐阜市の正道院)あり、美濃は播隆の本拠地であったといえる。

飛騨における笠ヶ岳再興のようすは高山市上宝町の本覚寺に残る『迦多賀嶽(かたがたけ)再興記』などに記録されている。それらには御来迎(ごらいごう)のようす(ブロッケン現象)などが詳しく記されており、山岳史上貴重な史料となっている。



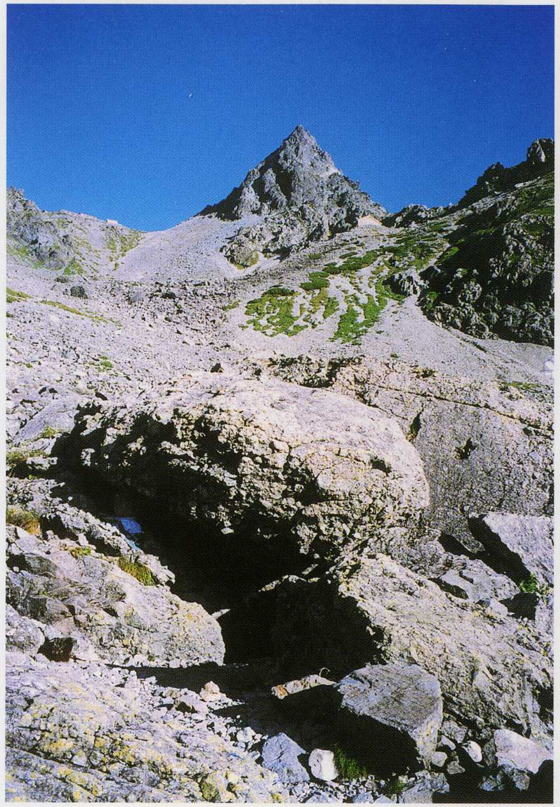
奥飛騨温泉郷から笠ヶ岳

播隆略年譜

年号	西暦	年齢	
天明 6	1786	1	越中国新川郡河内村(富山県富山市河内)に生まれる
文化 元	1804	19	尾張国の尋盛寺(名古屋市)の性誉上人に弟子入り 「行状記」によると、この年、大和国(奈良県)阿辺ヶ峰の見仏上人の弟子となる
11	1814	29	江戸本所の霊山寺(東京都墨田区)で浄土

播隆筆による槍ヶ岳寿命神、南無阿弥陀仏の軸を掲げて勤められる播隆念仏講（松本市内）

播隆の字を石に刻んだ名号碑
（松本市・玄向寺）



播隆が使用した播隆窟（ばんりゅうくつ）（旧坊主の岩小屋）と槍ヶ岳の山頂

槍ヶ岳開山

播隆の槍ヶ岳開山の道案内人となったのは安曇野市三郷小倉の中田又重（またじゅう）であった。又重はいつも播隆の槍ヶ岳登山に付添い、影のように働いて播隆を支えた槍ヶ岳開山の功労者である。

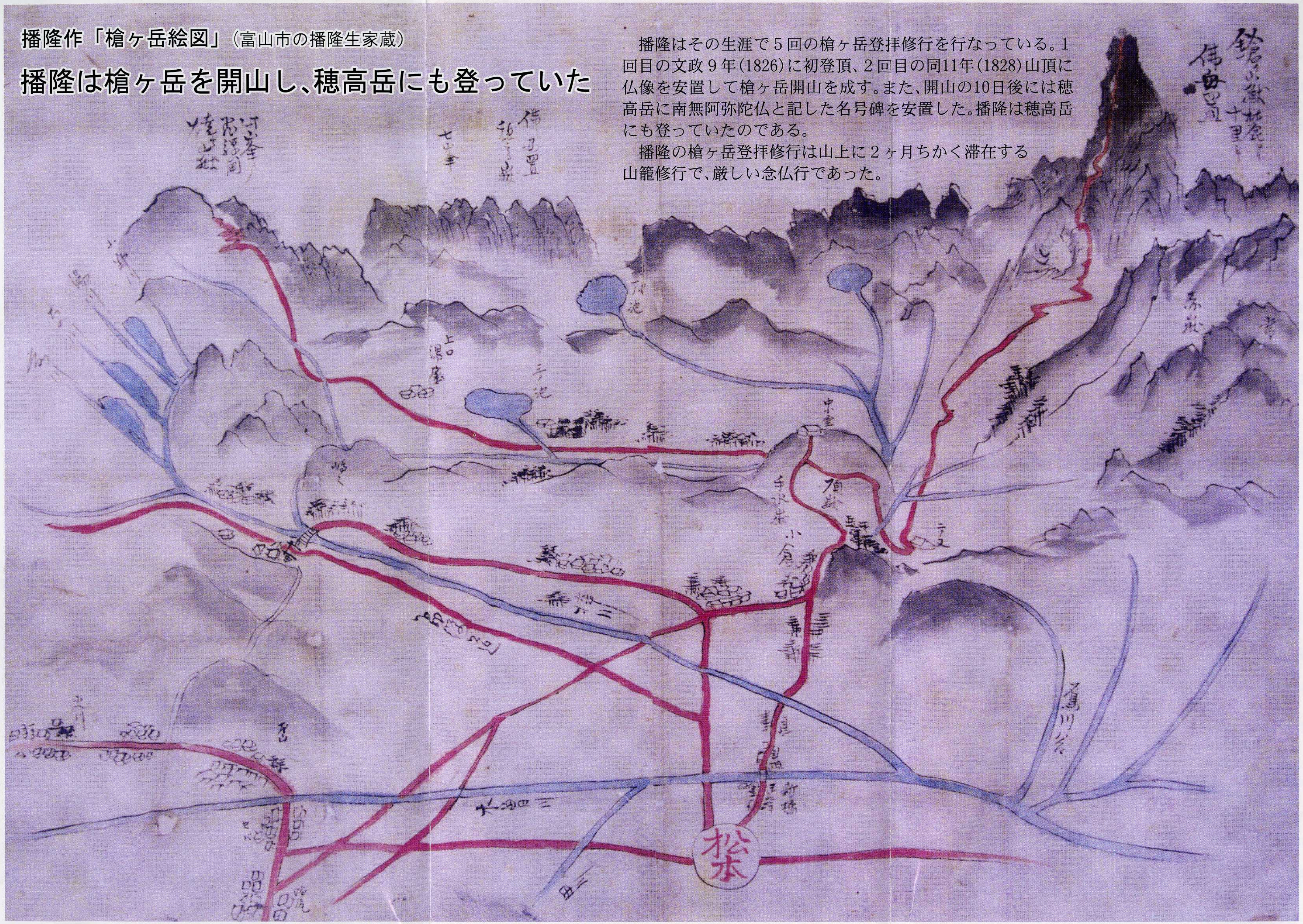
播隆は登山道を整備し、山頂を平らげて「善の綱」（仏と縁を結ぶ綱。山頂でブロッケン・御来迎を拝する）と名付けた鉄鎖をかける。松本市内の玄向寺には御来迎のようすを詳しく記した『三昧発得記（さんまいほっとくき）』が残されている。登拝信仰を確立した播隆は富士講、御岳講のような槍ヶ岳念仏講を組織していた。

			宗の正式な僧となる
文政 元	1818	33	この頃、山城国の一念寺（京都市）の蝎誉上人のもとで修行する
3	1820	35	＊飛州新道開削着工
4	1821	36	飛騨国の杓子の岩屋（岐阜県高山市上宝町岩井戸）で山籠修行する
6	1823	38	６月頃、初めて笠ヶ岳に登る ７月29日、笠ヶ岳への登山道が整備され、２回目の笠ヶ岳登山 ８月５日、村人18人とともに３回目の笠ヶ岳登山、御来迎（ブロッケン現象）を拝す ８月22日、「迦多賀嶽再興記」を書く
7	1824	39	８月５日、村人ら66人とともに４回目の笠ヶ岳登山、御来迎を拝す 登山道に石仏、山頂に阿弥陀仏像を安置する ＊夏までに飛州新道、上高地まで開通
8	1825	40	この頃、伊吹山の岩屋や草庵（播隆屋敷）で修行する
9	1826	41	８月、小倉村に中田又重を訪ね、その案内で１回目の槍ヶ岳登山
11	1828	43	７月20日、２回目の槍ヶ岳登山 山頂に仏像を安置して槍ヶ岳開山を成す
天保 元	1830	45	この頃、美濃国に播隆開山の一心寺（岐阜県揖斐郡揖斐川町）が建立される
4	1833	48	８月、３回目の槍ヶ岳登山
5	1834	49	６月18日、４回目の槍ヶ岳登山 ８月12日、下山 その間、山項付近に藁縄と木鉤で作った善の綱を設置する ８月、「三昧発得記」を書く
6	1835	50	６月24日、５回目の槍ヶ岳登山 10月３日、鍋冠山中で小屋掛を図るが大雪で失敗、足の指二本を凍傷で失う ＊飛州新道全通
7	1836	51	４月、松本新橋の信徒・大坂屋佐助が信州鎗嶽畧縁起」を施版・配布し、善の綱掛け替え用となる 鉄鎖の資金を募る 鉄鎖で作られた善の綱が天保の飢饉のため松本藩に差し押さえられる
10	1839	54	下総国の徳願寺（千葉県市川市）で加行し、浄土律宗和上となる
11	1840	55	この年、槍ヶ岳への鉄鎖取り付けが許可される ７月、玄向寺（長野県松本市）で病に伏す ８月頃、信徒らによって槍ヶ岳山頂に鉄鎖でできた善の綱が設置され、大願成就する 10月21日、中山道太田宿（岐阜県美濃加茂市）で大往生する　行年55歳

注　年齢は数え年
（黒野こうき監修・市立大町山岳博物館作成）

播隆作「槍ヶ岳絵図」（富山市の播隆生家蔵）

播隆は槍ヶ岳を開山し、穂高岳にも登っていた

播隆はその生涯で５回の槍ヶ岳登拝修行を行なっている。１回目の文政９年(1826)に初登頂、２回目の同11年(1828)山頂に仏像を安置して槍ヶ岳開山を成す。また、開山の10日後には穂高岳に南無阿弥陀仏と記した名号碑を安置した。播隆は穂高岳にも登っていたのである。

播隆の槍ヶ岳登拝修行は山上に２ヶ月ちかく滞在する山籠修行で、厳しい念仏行であった。